



子どもの歯の健康を守るために!

「8020運動 (ハチマルニイマル運動)」

厚生労働省が推進する80歳になっても自分の歯を20本以上保つことを目標とした運動です。

この運動は1989年に厚生省(当時)と日本歯科医師会が提唱し、生涯にわたり自分の歯で食生活を楽しむことで生活の質を維持することを目的としています。8020運動の推進により、国民の口腔の健康状態は改善され、8020達成者も増加傾向にあります。

20本以上の歯があれば、ほとんどの食物を噛むことができ、食生活に満足できると言われています。よく噛むことは唾液の分泌を促進し、消化吸收を助けるだけでなく、脳の働きを活発にして認知症予防にもつながります。8020を達成するには、小児期からのむし歯や歯周病の予防が重要です。

歯と口の働きは、上記のように人の生命を維持し、生活と深くかわるものです。また、心豊かに人生を過ごすための機能にも関係しています。

人の歯は、生後6か月頃から乳歯が生えはじめて、3歳頃に乳歯列が完成します。そして乳歯が永久歯に生えかわって12歳頃に永久歯列が完成します。つまり、こども園から小学校の時期に、人の歯や口は大きく変化します。

学齢期(小学校期)は、乳幼児期に保護者等が中心となって歯の健康も管理してくれている時代から、成人期のように健康は自分自身で守り育てる時代への「移行期」にあたっています。

健康づくりの視点からみると、乳幼児期には病気の状態は理解できても、健康を理解することは難しいといえます。学齢期になると、基本的な生活習慣の確立を図りながら、さらにいろいろな健康課題に自律的に取り組むことができるように支援することが重要になります。学齢期に健康観をはぐくむことが将来の国民の健康増進に直結するのです。

参考引用:「生きる力」を育む学校での歯・口の健康づくり(令和元年度改訂)
日本学校保健会



鏡で見ながら歯磨き中
(高篠こ)



丁寧に歯磨き中(琴南こ)



ブクブクブク...
フッ素洗口 (四条小)

厚生労働省の資料によると、フッ素洗口は、歯を強くする(耐酸性の増強)、初期のむし歯を修復する(再石灰化の促進)、むし歯の原因菌の働きを抑制するという3つの作用により、むし歯を約30~80%予防する効果があると報告されています。

この効果を確実に得るためには、第一大臼歯が生え始める6歳ごろに合わせた開始と長期間の継続が必要です。

町では、平成23年度から順次、すべてのこども園、小・中学校で、保護者が希望する子どもたちを対象に、フッ素洗口を定期的に実施しています。

子どもたちのむし歯の数は、全国的に減少しています。これは、フッ化物※配合歯磨剤の普及、予防歯科への意識の高まり、歯科医院での定期的な検診やフッ素塗布の一般化、そして保護者の口腔衛生意識の向上などが組み合わさった結果だと言われています。

町でも、下のグラフのようにむし歯のある子どもたちが減少しています。

これは、こども園や学校で、定期的な歯科健康診断を行い、治療の必要な子どもたちへの治療の奨励、給食後の歯磨きの励行、フッ素洗口の実施、学校歯科医や委員会児童による歯磨き指導、保護者啓発などを行って、歯の健康を守る活動を継続して行った結果が表れていると考えられます。

※フッ化物:「フッ素」は元素の名前で、単体では猛毒ですが、他の元素と結合した「フッ化物」は虫歯予防に有効で、歯磨剤などに配合されています。私たちが一般的に「フッ素」と呼んでいるものは、フッ化物(フッ素化合物)のことです。以下フッ素と表記。

DMF指数...

う蝕(むし歯) 経験を表す指標の一つ

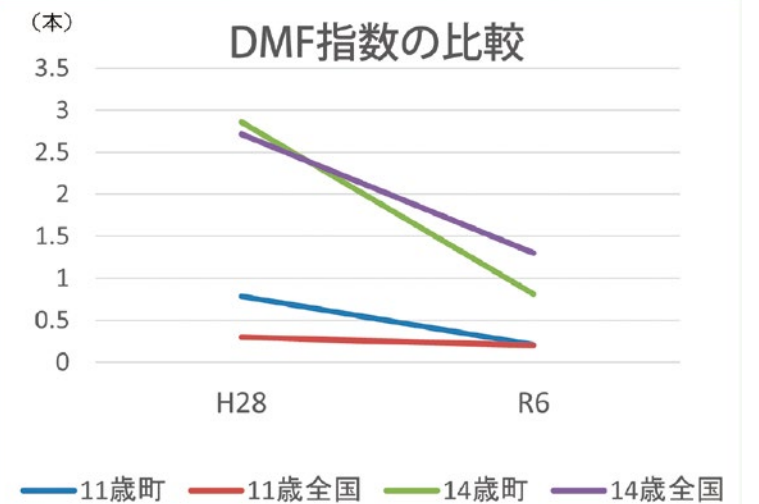
むし歯に罹患すると自然治癒が期待できないために、経験歯数として表すべきだとして、集団における永久歯列のむし歯罹患状態を知るために用いられる指標です。

•Decayed(むし歯の歯):現在、治療が必要なむし歯がある歯。

•Missing(欠損歯):むし歯が原因で抜かれた歯。

•Filled(充填された歯):むし歯の治療を受けて詰め物やかぶせ物がされている歯。

上記3つの歯数を合計し、1人あたりの平均値で示したものです。この指数が高いほど、その集団はむし歯の経験者が多いことを示しています。



歯科健康診断(長炭こ)

特別寄稿



学校歯科医として長年にわたり、子どもたちの歯の健康に関わっていらっしゃる平田歯科医院の平田純先生に、子どもたちを見て感じることや保護者、地域の方に大切にしてほしいことなどについて寄稿していただきました。

学校歯科医の立場から、子どもたちの口の健康について

学校歯科医 平田 純
(平田歯科医院)

学校歯科医として、子どもたちの歯の健康に関わっている中で大切にしていることは「予防の習慣を身につけてもらう」ということです。

虫歯や歯肉炎は、症状が出てから治療するのではなく毎日の生活の中で予防していくことがとても大切です。例えば、今では町内全てのこども園、小・中学校で行われているフッ素洗口です。僕が学校歯科医になって約25年たちますが、フッ素洗口を始める前と後では明らかに子どもたちの虫歯の数が減りました。フッ素の効果ももちろんありますが、一人ひとりが歯と口の健康に少しずつ意識を向けてくれたことも大きいのではないかと考えています。このことは、歯科医院での定期検診が一般的ではなかった25年前と比較して、今ではごく一般的なものになった事からも想像できます。

また、虫歯予防については、特に小学校の時期は子どもの歯から大人の歯へと生え変わる大切な時期で、将来の口の中の環境を大きく左右することになります。

歯みがき指導やフッ素洗口、定期的な歯科健診を通して、子どもたちが自ら自分の歯に関心を持ち、自分でケアする習慣を身につけてくれたらと思っています。そのために、僕が担当させていただいている小学校では、毎年、3年生と5年生を対象に、秋の歯科健診に合わせて歯みがき集団指導を行っています。3年生には虫歯予防を中心に、5年生には歯肉炎、歯周病予防を中心に行っています。面と向かって指導をすることで、文章や写真だけでは伝わらない「なぜ、歯を大切にしないといけないのか」「自分の行動で未来がどんな風になるのか」を直接伝えていこうとがんばっています。この集団指導が、子どもたちが自分の口の中を意識し、行動が変わるきっかけになってくれることを期待しています。

保護者の方をお願いしたいことは、仕上げ磨きや定期検診を続けていただきたいということです。特にこども園、小学校低学年のうちは自分ではきれいに磨けない部分が多く、保護者のサポートが欠かせません。また、学校の歯科健診で指摘があった場合はできるだけ早く歯科医院を受診し、必要な治療や予防処置を受けてください。治療を先延ばしにすると、痛みや恐怖から子どもが歯科嫌いになってしまうこともあります。



歯磨き指導をする平田歯科医

歯と口は、食べる、話す、笑うといった人間らしい営みの基盤です。その健康を守ることは、子どもたちが将来、心身ともに健やかに成長するための土台作りだと考えています。家庭と学校、地域が一体となって子どもたちの口の健康を支えることで、一人でも多くの子どもたちが一生自分の歯で食べ、笑い、豊かな人生を送れるようになると思っています。

こども園や小・中学校で行われている

歯科健康診断・歯磨き指導



委員会児童による歯磨き指導
(満濃南小)



学校歯科医による歯磨き指導(琴南小)



鏡を見ながら歯磨き(高篠小)



歯磨き指導(四条小)



歯科健康診断(琴南小)



親子で染め出し※をして歯磨きチェック
(満濃南小)

※染め出し：歯垢を専用薬で赤などに染め、磨き残しを可視化する方法

学校歯科医って？



みなさんは、学校で歯科健康診断を受けた思い出があると思います。大きな口をあけて、CやCO、○、×、Gなど様々な記号を聞いたのではないのでしょうか。学校歯科医はどんな仕事をしているのでしょうか。

学校歯科医は、学校保健安全法に基づき、大学以外の学校で歯科健康診断、歯科保健指導、歯科保健教育などを行う歯科医師です。

学校医として子どもの成長過程における歯科保健を担い、養護教諭や担任教師と連携しながら、食生活指導やブラッシング指導、健康相談などを通して、児童生徒の口腔衛生と健康増進に貢献しています。

歯科健康診断だけではなく、いろいろな仕事をしています。主な仕事は・・・

- 歯科健康診断や就学時の健診を実施します。処置や指導が必要な児童生徒がいれば、家庭への連絡や専門医への受診勧奨、継続的な観察指導を行っています。
- 歯科保健指導、ブラッシング指導、食生活指導など、歯や口の健康づくりのための教育活動を行っています。
- 学校保健活動の基盤となる学校保健委員会などに参加し、指導助言を行っています。

これまで見たように、こども園、小・中学校では、子どもたちの歯の健康を守るために、学校歯科医などと連携し、いろいろな活動を行っています。歯の健康を自分で守ることは、将来の健康を維持、増強するため大変重要です。国の調査では、子どもたちのむし歯は減っていますが、成人になると増加していく傾向が見られるそうです。学校などで健診や予防のための活動をしているうちに、歯の健康を守る意識を醸成し、自分の歯を大切にしようとする人に育てることが大切だと感じました。

長炭小学校では、低学年は「なかよくがんばる」中学年は「友を思い、自分を鍛える」高学年は「他を思い、自己を鍛える」ことを目標に、日々の教育活動に取り組んでいます。年間を通じて「他を思い、自己を鍛える」子どもを育てるために、なかよし班活動を行っています。

春のなかよし遠足にトライ！

新年度が始まると、新メンバーでのなかよし班が編制されます。顔合わせの会では、新1年生も入るのでお互いにドキドキしています。新しくリーダーになった6年生も初めてのメンバーに緊張しながらも、恥ずかしがって言いにくい子がいたらやさしく声をかけたり、答えやすいようにいくつか選択肢を示したりするなど、下学年の子どもたちを気遣いながら自己紹介を進めています。

そして、春の遠足に向けての計画づくりを行います。それぞれの班ごとに、遊ぶ内容はもちろん、時間配分や遊びのルールなど、みんなの意見を取り入れながら決めていきます。当日も班の仲を深めるという遠足のめあてを常に意識しながら、班ごとのパフォーマンスやゲームを楽しんだり、カリンの丘公園までの行き帰りの長い道のりも、安全に気をつけて一緒に歩いたりしました。



だるまさんがころんだ



一緒に歩けば平気だよ

運動会にトライ！

運動会に向けて、なかよし班の旗づくりを行いました。6年生が旗づくりをスムーズに進められるように準備をし、それぞれの旗が思い思いの絵を描いて旗が完成しました。

なかよし班での掃除にトライ！

なかよし班活動は、行事だけではありません。毎日の掃除もなかよし班で行います。まず、掃除の分担を決めます。これも上学年と下学年がペア・グループになり、希望を聞きながらみんなが納得するように話し合います。そして、日々の掃除の時間には、上学年がそうきんの使い方の手本を見せたり、掃除の手順を教えたりしています。掃除の振り返りでは「こんなところが



こうやって拭くよ

「他を思い 自己を鍛える」子どもに

長炭小学校

運動会では、なかよし班対抗綱引きや玉入れを行いました。玉入れでは「こうやって投げるといいよ」と投げ方のアドバイスをしたり、かごの周りの円からはみ出ている子を、後ろからそっと近づけたりしていました。綱引きでは、迫力のあふれる大きな声をかけ、なかよし班みんなの気持ちを高めていました。学年のペアフォーメーションでは、それぞれの学年のよさを見つけて、手拍子で盛り上げました。いろいろな競技の中で、いろいろな声かけをし、みんなで励まし合っている姿が見られました。



引け〜(対抗綱引き)

よかった」「明日はこうしたい」と、みんなが話しています。日常的なかかわりでよい関係が築かれています。

花の植え替えにトライ！

校舎の入り口に来るとプランターに植えられたきれいな花が一際目を引きまします。なかよし班のペアでプランターに花を植え、世話も分担して行います。花の植え替えでは、上学年が花の苗の植え方を教えて見せながら丁寧に教えていきます。このような小さなかわりの積み重ねが子どもたちの仲を深めてくれるでしょう。



植え方を見て

ハッピーマンデープロジェクトにトライ！

月曜日がしんどい子が少しでも学校生活を楽しくしながら過ごすことができるように、月に一度、ハッピーマンデープロジェクトをしています。これは子どもから発案されたものです。朝「マツケンサンバ」の音楽が流れ、その日がハッピーマンデーだということを知らせました。その日だけは掃除の時間をカットし、子どもたちも先生も一緒に45分間、仲を深めながら思い思いの遊びをします。他を想う優しい気持ちがあふれていきます。



先生も一緒に楽しく遊んでいます

異学年での様々な活動を体験することで、他者に対する意識や関心を高め、人間関係を調整していく力が身につきます。今後子どもたちの自己有用感を育て、自立に向かう教育を進めていきます。

笑顔があふれた親子ミニ運動会

秋の親子ミニ運動会には、たくさんの保護者が参加しました。0歳から2歳児は、大好きな曲に合わせて踊りました。3歳から5歳児は、ボールを使って、異年齢で毎日生活してきたからこそ息の合った演技をしました。また地域の方といきいき体操をしたり、自分たちで考えた玉入れを楽しんだりしました。

フィナーレの親子踊りは、今年は予め踊り方を動画で配信したので、保護者から「家でも踊りました」と、うれしそうなお声が聴かれ、親子で触れ合いの機会となりました。当日も何度もきゅんと抱きあったり、空まで届くような「たかいたかい」をしてもうたりして、園庭中に笑顔があふれました。

当日だけで終わらないのがこの運動会の運動会です。次の週、0歳から2歳児クラスには手作りのバルーンが登場し、いつ覚えたのかお兄さんやお姉さんと同じ曲で同じように踊る姿にびっくりさせられました。



ぼくたちの考えた玉入れ



笑顔があふれています！

カナヘビの赤ちゃんが生まれた

6月の朝、子どもたちがカナヘビの飼育ケースの中に卵が3個生まれているのを見つけた。うれしくて園舎中に知らせた子どもたち。一方で職員は顔を見合わせて「えっ、どうする」と、初めての出来事に戸惑いが隠れません。それでも子どもたちの喜び顔を見て「どうにかしなくては」と、心が動かされます。すぐに保育室のタフレットで調べ、別の容器に大事に入れ替え、上下がひっくり返らないように気を付けながら生まれるのを待つことにしました。飼育の方に詳しい保護者にも聞きながら、みんなでお見守りました。

そして七夕の日、願いは叶い、3匹の赤ちゃんカナヘビが誕生しました。「本当に会えた」「元気に動いている」「生まれるんだ」と、みんなびっくりしたり感動したりしました。大きくなるまで育てたいという思いもありましたが、飼育をするのは難しいと知り、相談して園庭に逃がすことにしました。

最初はどなるんだらうとドキドキしましたが、子ども思いに気持ちを重なることで、職員も初めての素敵な体験をすることができました。



生まれた赤ちゃんカナヘビ



かわいい 動いている！



共に楽しむ！

やった〜！膨らんだ

長炭こども園



温泉 気持ちいい！

みんなの願いが叶ったお楽しみウィーク 毎年、年長児が楽しみにしている夜までお楽しみ保育。今年は、子どもたちも先生もやりたいことがいっぱいあつて「それならお楽しみウィークにしよう」ということになりました。毎日したいことが詰まった週間でした。

「温泉に入りた〜い」と、プールにお湯を入れて、園庭で温泉につかりました。鯉のぼりが好きすぎて「本物の鯉が見たい」と、地域の方の家にいき、りっぱな鯉を見せてもらいました。「町探検がしたい」と、公民館長や駐在所員、小学校の校長先生とゲームやクイズを楽しみました。行く先々で温かく迎えてくださり、地域の子どもたちを大切にしてくれているのが伝わってきました。また、最終日の夕食には「そうめん流しがしたい」と、おじいさんに竹を切ってもらい、自分たちでそうめんを買いに行きました。一緒に流す野菜の型抜きやデザートは、町の栄養士に教えてもらって作りました。



公民館長にシールをもらいました

そうめん流し

夜になり、毎年恒例のお化け屋敷の時間になりました。今年は、職員だけでなく保護者も参加したいと言ってくれ、内緒で手作りの衣装まで用意してくれました。怖くて泣いたり途中で引き返そうとしたりしながらも「みんなががんばろう」と勇気を出して、最後までやり切った子どもたちでした。たくさんのおやみもちを表現した子どもたちはもちろん、保護者にとってもいい思い出になったようです。

保護者、地域と共に歩むこども園に 年度初めに、今年ができるだけたくさん親子で触れ合える行事を行ってほしい、という保護者の思いを聞きました。仕事や家事で忙しい中で子育てをする保護者にとって、園行事はゆとり子どもと触れ合える特別なものになっているようです。今後も、その子らしさを大切に、保護者、地域と共に子どもが育つこども園のあり方を考えていきたいと思っています。

人権週間に寄せて

人権週間は、毎年12月4日から10日までの1週間です。これは、1948年12月10日に国連で世界人権宣言が採択されたことに由来しており、日本でも翌1949年からこの期間が人権週間として定められました。

私たち一人ひとりが様々な人権問題を、自分以外の「誰か」のことではなく、自分のこととして捉え、互いの人権を尊重し合うことの大切さについて、認識を深めることが不可欠です。

私の兄は目が見えない
だが私よりも人生が不利なわけじゃない。
損しているわけじゃない。
ただ「障がい者」という名の肩書きをもっているだけ。
ただ、それだけ。
だから兄はいつも言う
「俺は目が見えないだけ。
声も出せるし体も動かせる。
俺は人生を100%楽しんでる。」

普段の何気ない生活の中で、ともすれば見過ごしがちな出来事を「人権」という視点から「詩」につづることで、身近な人権について見つめ直していただくことを目的に、和歌山県人権啓発センターでは、毎年「人権（こころ）の詩（うた）」を募集しているそうです。

左の詩は、2023年度中学生の部で知事賞（最優秀賞）を受賞した中学1年生の「私の兄」という作品です。

引用：「人権の詩2023コンクール」
和歌山県人権啓発センター



たばたせいいち
先天性四肢障害児父母の会
のべあきこ、しざわさよこ 共同制作
発行：偕成社

今年の夏の甲子園では、生まれつき左手の指がない県立岐阜商業高校の外野手、横山温大選手が活躍しました。横山選手はボールを右手のグラブで捕球した後、器用に左脇に抱えて右手に持ち替え投げるプレーを披露しました。「ハンディキャップを背負っていても、できることをアピールしたい」という横山選手の言葉は、多くの人に感銘を与えました。

幼少期の横山選手は、小学校に上がったらみんなと同じ手になれるのか、と心配する様子も見せていたそうですが、両親は「さっちゃんのまほうのて」という物語を見せたのだそうです。この物語の中には、右手の指のないさっちゃんが幼稚園で友だちと遊びながらジャングルジムでてっぺんまで登ろうとしている場面があります。横山選手はこの物語から勇気をもらったのかもしれません。そして「自分みたいな子たちが勇気をもらえるような活躍を見せられたのは、自分としても良かった」とも話しているそうです。

前向きな生き方を願い支える保護者も、自分の可能性を信じてそれを得意にできた横山選手も、とても素晴らしいと感じました。



第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025 2025年11月15日～26日(12日間)

70～80の国や地域から約6000人が参加して東京で初めて行われました。

テレビでも放送されたので、選手たちが競う姿に声援を送られた方もいるのではないのでしょうか。

デフリンピック(Deaflympics)とは、デフ+オリンピックのことです。

デフ(Deaf)とは、英語で「耳が聞こえない」という意味です。デフリンピックは国際的な「聞こえない・聞こえにくい人のためのオリンピック」です。障害者のための競技大会としては「パラリンピック」がありますが、デフリンピックは歴史が長く、パラリンピックには、聴覚障害者の出場競技はありません。オリンピックと同じように4年に1度、夏季と冬季にそれぞれ開かれます。ルールはオリンピックとほぼ同じですが、耳の聞こえない人のためにランプによるスタートなど様々な工夫がされています。

ドイツの哲学者カントが言った言葉で、ヘレンケラーが引用して有名になった「目が見えないことは人と物とを切り離す。耳が聞こえないことは人と人とを切り離す」があります。障害の有無にかかわらず、人と人がつながるコミュニケーションを大切に、互いに尊重しながら共生する社会をめざしたいですね。

地域・関係機関とともに子どもを育てる

子どもに関わる問題の多様化が進む中、こども園や小・中学校での対応も困難さを増しています。子ども自身の身体的・精神的状況だけでなく、人間関係や家庭環境などの様々な背景による問題も多く、こども園や学校だけで解決できることばかりではありません。保護者を含めた様々な立場の人が連携しながら問題に携わっていくことが重要です。そういった連携を深めるためにはスクールソーシャルワーカー(以下SSW)の存在が欠かせません。

そこで、教育研究所では、町内こども園、小・中学校の教員に向けてSSWとしてまんのう町での勤務経験もある藤澤茜さんをお迎えし「かわかりを基盤にした支援を考える～スクールソーシャルワーカーとしての立場から～」の演題で講演会を開催しました。その後、本町のSSWとの対談を行い、子どもたちへの支援の在り方について理解を深めました。



関係性を大切に 安全基地に!

私が大切にしていることは、次の2つです。

- ・子どもの一人ひとりの思いを理解し一緒に考え、一緒に選択・決定し、その結果も一緒に責任をとることを継続していくこと
- ・子どもの安全基地(キーパーソンとなる人の存在)を見つけること

また、子どもは自立と依存を繰り返して大きくなるので、子どもが頼ってきたら、子どものペースで付き合っていくことが必要です。子どもが安心感をもつことで、それが意欲の基となり自立に向かっていくことができます。

保護者を含めた様々な立場の人との連携は、子どもの自立を支える「子育て」のチームとして、それぞれができる範囲を少しずつ広げることで深まります。SSWはそんな子どもたちを支えるために、学校を基盤に子ども、先生、家庭などのつながりづくりをしています。(講演より)



講演を聴いた先生方の感想

SSWが子どもとかかわるときに大切にしていることを知って、これから自分がどうかかわっていけばいいのか学ぶことができました。

子どもを主体として考えることを大切にしながら「子育て」を支えるチームの一員として、SSWや保護者と連携して取り組みたいと思います。

子ども一人ひとりが意思表示できる環境・雰囲気づくりを大切にし、子どもの話をしっかり聴きたいと思います。



本町SSWとの対談

想像する力・共感する力を大切に

くすのきしげのりさん講演会
於：高篠小 (9.19)



全校児童、保護者を対象に、児童文学作家 くすのきしげのりさんを迎えて「本を読むこと 考えること ～未来に向かってすこやかに～」の演題で講演会が行われました。

くすのきさんは、自分の作品を読み聞かせながら、そこに込められた思いや願いを優しく語りかけました。そして、大人でも相手の心の動きや考えがわかっているつもりで、実はわかっていないことがあることをわからなければならないということ、相手のことがわかるには「想像する力」「共感する力」が大切であることを話されました。

また、夢・志について、仕事に就く、資格を取ることがゴールではなくスタートであること、一日を大切に生きることが誰にでもできる大きな社会貢献であると訴えました。

最後に「みなさんの毎日に、みなさんの未来に、たくさんの笑顔がありますように!」と、しめくられました。

子どもの安全基地になるために できること

スクールソーシャルワーカーとして、一人の子どもの親として、私が大切にしているのは「子どもの思いを中心に据え」かわるということ。私たちがおとなは、子どもの思いをどれだけ理解し、対話できているのでしょうか。その対話は、おとなのために子どもが合わせているか。子どもと対話を重ねる中で、子どもの深い思いやユニークな発想、素敵なアイデアに触れることが多くあります。一人ひとりの思いを理解し、ともに考え、ともに選び、ともに決めていく。そして、その結果にも一緒に責任を持つ。そんな関わりを、何度も何度も積み重ねてきたように思います。時には「えっ、そっちを選ぶの？」と驚くような選択をすることもあり。その時も、それを選ぶ理由を子どもに確認すると、その子の考えの背景にある思いをしっかりと教えてくれます。ただ、その選択にリスクがある場合は、そのリスクを伝えて別の選択肢を考えた。他の人の意見を一緒に聴いて協議したり、時には折り合いをつけた。りしながら、子どもが自分自身のことに取り組み姿を、そばで支えることを意識しています。私はあくまで、傍らで「大丈夫だよ」と、ともにいる存在でありた

いと思っています。こうした「安全基地」となる存在、子どものことを信じ、理解し、分かってくれるキーパーソンの存在は、子どもの育ちにとって本当に大切なと感じています。それは、子どもに限らずおとなにとっても同じです。誰にとっても、安心して過ごせる「人」や「場」は欠かせません。そのキーパーソンとなる存在をどう創っていくのか、そして、そのキーパーソンが他の人との関係づくりへと橋渡しをしていき、人間関係をどう広げていくのか、が大切です。

ただ「子どもをまんなかに」や「子ども主体に」と言っただけでは簡単です。それを実践するには、体力（ゆとり）と体温（受けとめる感性）も必要です。つまり、自分をいい状態に保つことが大切になります。子育ては感情労働のひとつでもあり、自他へのケアが不可欠です。一人で抱え込まず、相談できる存在や頼り合える存在はいますか。「キーパーソンのキーパーソン」が必要で、自立」とは、支え合いながら生きていく力を育むことだと私は考えています。私には、一緒に「コーヒ」を飲みながら話せる人や聴いてくれる人がいます。また、我が子と一緒にのんびりテレビを眺めたり、コーヒープレイクしたりする時間も癒しになっていま

教育研究所研修会で講演をいただいた藤澤茜さんに、町民のみなさんに向けて、スクールソーシャルワーカーとしての豊富な経験をもとに、子どもとのかかわり方について執筆いただきました。

執筆者の紹介、研修会の内容については、8ページをご参照ください。



(スクールソーシャルワーカー 藤澤 茜)

す。お互いの「すきなこと」を一緒に楽しむ中で、普段は語らないような思いを共有することもあります。特別なことをしなくても、日常の中にあるちょっとした時間を使って何気ない対話をする。と、一緒にいるということ——それこそが、何よりもかけがえのない時間だと、私は思っています。よかったです、お子さんと対話をして、子どもの世界に触れてみてください。

仲多度郡・善通寺市 小学生陸上記録会



80mハードル

5女②小野 心暖（高篠） 17"07

100m

6女①河口 胡海（高篠） 14"30

6男①橋本 淳平（仲南） 13"64

③中西 優真（仲南） 14"39

走高跳

5女①大平 茉央（四條） 114 cm

6男②溝口 来彪（四條） 120 cm

③森本 虎哲（高篠） 115 cm

成績優秀者は、11月1日、3日に開催された香川県小学生選抜陸上競技大会に出場しました。

10月8日：香川県立丸亀競技場

出場した選手は、保護者、友だち、先生方の応援を受け、自己新記録をめざしてがんばりました。

入賞者（第3位まで：①②③は順位を表す）

走幅跳

5女②佐川 未来（仲南） 320 cm

③大西 紬（仲南） 314 cm

5男①平尾 楓（高篠） 385 cm

③徳井 俊春（四條） 382 cm

6女③池下明香里（四條） 327 cm

ジャベリックボール投

5女③朝倉 眞穂（満濃南） 29.64 m

6女③鈴木 茉菜（仲南） 36.75 m

6男②栗田 泰成（四條） 48.54 m

香川県小学生選抜陸上競技大会

（11月1日：県立丸亀競技場）

6年女子100m 第3位 河口 胡海（高篠） 14"06



こども園指導訪問

教育委員会では、こども園の教育・保育の充実をめざして、毎年3園ずつ教育委員が教育・保育の様子を参観しています。満濃南こども園では、香川大学教育学部松井剛太准教授、琴南こども園では、同松本博雄教授、四條こども園では、同片岡元子教授よりご指導をいただきました。

どの園も、一人ひとりの子どもの思いに寄り添い安心して過ごせる園づくりや、遊びを豊かにするための環境づくりの工夫などを行い、教育・保育の充実をめざしています。



満濃南こ（7.10）



琴南こ（9.8）



四條こ（10.6）

校内研修参観

今年度も、町内の小学校の校内研修の充実により、教員の授業力の向上を図ることをめざして、教育委員による校内研修参観を行っています。



高篠小（10.1）



琴南小（10.14）

わたしたちもやってみよう!



長炭こども園

編集後記

「言葉は刃物」です。教育研究所研修会の講演会でスクールソーシャルワーカーの藤澤さんが紹介されたものです。

この言葉は、名探偵コナンが「一度口に出した言葉は元に戻せない、言葉は刃物であり、使い方を間違えると厄介な凶器になる。言葉のすれ違いで一生の友だちを失うこともある」と、言ったものです。

(引用：劇場版名探偵コナン『沈黙の15分(クォーター)』)

また、絵本作家のくすのきしげのりさんは、高篠小学校での講演会で「私たちは、相手の心の動きや考えについて、わかっているつもりで、実はわかっていないことがあるのだ、ということを知っていなければならぬ」と話されました。

どちらにも共通することは、想像力や共感力、相手の心を思いやる力の大切さを言っているのだと思います。

藤澤さんの講演を拝聴した後、思いだした詩があります。それは、詩人北原白秋さんの「ひとつのことば」という詩です。

ひとつのことば
北原 白秋
ひとつのことばでけんかして
ひとつのことばで頭が下がり
ひとつのことばで心が痛む
ひとつのことばで楽しく笑い
ひとつのことばで泣かされる
ひとつのことばはそれぞれに
ひとつの心を持っている
きれいなことはきれいな心
やさしいことはやさしい心
ひとつのことばを大切に
ひとつのことばを美しく

私たちが生活する中で、人とコミュニケーションをとるために言葉は不可欠です。近年、SNSでの交流もよく行われています。悪気なく言ったり、使ったりした言葉であっても、相手には刃物のように突き刺さることがあります。だからこそ自分の使った言葉が刃物にならないように気をつけなくてはなりません。

12月4日から10日は人権週間です。

相手の心を思いやり、想像力や共感力を働かせて、美しい優しい言葉を遣える子どもたちに成長してほしいと願っています。

表紙絵：長尾 遥（満濃中学校美術部1年）

次号予告
(2月1日発行)

特 集

園・学校ウォッチング

自分に気づき 未来を創る～キャリア教育～

仲南小学校・四条こども園